

NTU-UT Linguistics Festa 2023 参加報告書

広域システム科学系 博士2年 羅思眷（植田研究室）

今回は「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」をいただき、2023年8月25日から8月28日にかけて台湾で開催された NTU-UT Linguistics Festa 2023 に参加し、「Acquisition of Japanese passive sentences by Chinese native speakers: An approach based on questionnaire surveys and textbook analysis」という題目でポスター発表をしました。この会は、国境を越えて新しいアイデアを交換し、最新の研究成果を議論し、共同プロジェクトの可能性についてブレインストーミングすることができるプラットフォームだと考えています。

今年は公立はこだて大学の宮本教授と国立台湾大学の Chiu 教授、お二方による講演が開かれました。宮本教授の専門分野は認知科学であり、人間の反応時間、表現の出現頻度等を実験によって数値化し、人間の認知モデルの構築等を研究内容とされています。宮本教授は今回の学会では、SVO (Subject-Verb-Object) と SOV (Subject-Object-Verb) といった言語の文法的な構造の違いが、文の理解や処理における認知的な負荷に影響を与える可能性があることを検証する実験を紹介されました。その内容は興味深く、私自身の言語と認知に関する研究に示唆してくださったと思います。台湾大の Chiu 教授は超音波を用いて口腔内の発音運動を解析する研究に従事されています。今回の学会ではその研究内容を紹介し、舌の運動のリアルタイム映像の録画、映像データの収集、そして一般的な統計分析方法の紹介などの実作業も見せてくれました。超音波の非侵襲的な特性とリアルタイムでの映像生成技術により、舌の運動と形態の測定に特に適していると言われ、これから自分の研究にも応用できる機会があるかもしれないと思います。

ポスター発表のセッションではあわせて19人が研究成果を発表しました。お年寄りの異なる程度の感情語彙に対して異なる程度の ERP (event-related potential: 脳の事象関連電位) イメージングの表現を示す認知脳科学の研究や、子供の第二言語の習得過程に対する追跡研究、結合性範疇文法 (Combinatory Categorical Grammar、略称 CCG) に基づく漸進的な意味解析の言語学研究などが挙げられます。私は中国語話者の日本語受動文の習得実態について調査結果を紹介し、ポスター発表する際も研究交流のセッションの際も、これからの研究改善点や他研究方法との結び付けの可能性について色々議論することができ、たくさん貴重な意見をいただきました。このような学際的な研究交流はそれぞれの参加者に研究のヒントを与えることに違いないと思います。私は言語と認知という題の下で研究をしていく中で、単なる言語学、心理学のみならず、脳科学や計算機科学などの知識も補完してはじめてよい基礎研究ができると痛感しました。これからは他分野・学科の研究手法を検討し、自分の研究内容に適するよりよい枠組を考えていきたいと思っています。



(開催地 国立台湾大学の一角)



(Presentation Certificate)